

時代の煩悶——藤村操「巖頭之感」の周辺（上）

「淋しさの極みに堪て天地に寄する命をつくくと思ふ」

左千夫

高橋新太郎

第一高等學校生藤村操が、人生「不可解」として華嚴の滝に身を投じたと推定されるのは明治三十六年五月二十二日である。

「那珂博士の甥華嚴の瀑に死す」という圈点付きの見出しの下に、他社に一日先んじて之を報じたのは涙香巖岩周六の『萬朝報』紙（五月二十六日）である。東洋史學で知られる高等師範學校教授那珂通世（しんせき）が中禪寺湖畔の旅館で二十三日夜にしたため、朝報社に投じた「藤村操の死を哭す」文には、藤村が華嚴滝口の檜の大樹を削って墨書して遺した「巖頭之感」と題された次の語が録されていた。

悠々たる哉天壤、遑々たる哉古今。五尺の小軀を以て此大をはからんとす。ホレーシヨの哲學竟に何等のオソソリチ
一を價するものぞ。萬有の真相は唯一言にして悉す、曰く「不可解」。我この悵を懷いて煩悶終に死を決するに至る。
既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし。始めて知る大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを。

涙香は早速翌二七日の紙上に「少年哲學者を弔す」と題する一文を草し、「我國に哲學者無し、此少年に於て初めて哲學者を見る、否哲學者無きに非ず、哲學の爲に抵死する者無きなり。獨のシヨッペンハウエル悲觀の極に樂觀ありと爲す、而も自死するに至らず。然らば哲學の極致は自死するに在るか、曰く何ぞ然らん、唯だ信仰の伴はざる哲學は、茲に窮極するなり」「余天人論を著す、……恨むらくは巖頭に感を書して六十丈の懸泉に投じたる此の少年哲學

者に一冊を寄獻するを得ざりしことを、『不可解』の一言を以て宇宙の秘を悉する時は過ぎたり、少年哲學者は悲觀の樂觀と合する所にホレーシヨ以外の光明に接したるか、大谷川の水、長へに碧にして、問へども答へず、余は那珂博士と同じく痛哭して之を記し、按目なく、新刊の自著、《宇宙倫理觀》と副題した『天人論』（朝報社、五月十四日刊）を引き合ひに出した。その故もあってか、この著は一箇月のうち五版を重ねて行った。

各紙は競って藤村操の投瀑に至るまでの動静を探り、当代知名の論客に、その所見を吐露せしめた。六月一日の『大阪朝日新聞』は、角田浩々歌客、木村寸木らを動員して「哲學と人生」（「青年の死と世論」）と題する社説を掲げ、これら世論を抄録・批判した。浩々歌客はそこで、「高生藤村操の死が何故に世人の注意を喚起するに至ったかを整理して、第一に「借金に苦み或は戀愛に溺され或は現世志望の遂げざるに依れるなど、自己若しくは社會との葛藤の結果に身を殺したるとは異に、宇宙といひ萬有といひ人生といふ」ように「事の關係學問に在り、自己の思想と自己存在との葛藤衝突にして、少くとも其死が悲壯の意義を含む故」だとし、第二には、その死処が平凡な場所ではなく「風趣直ちに人をして深遠の意義をしのばしむる日光山華嚴の瀑」なること、第三は「失戀の慘蹟を留めし益田氏の子が投身したる前例」あること、第四は、藤村操が青年なること（數えの十八歳、現代風にいえば満十六歳十カ月、第五に、その死を報道した叔父が名誉ある文學博士なることを挙げ、「なほ巖頭の樹を白らげ遺書を留めたるの行爲は博士の報にある通り從容死途に就きたりと見ると共に極めて小説的なることは、殊に世人を注目させしものなるべし」と付した。そして、前記の『萬朝報』（涙香）や「其解決すべからざるの解決を尋ねんと欲す、是れ實に忍ぶべからざるの痛恨の事なり……凡そ人たるもの、人事を盡して天命を待つの外、豈に他の道あらんや」とする『國民新聞』（徳富蘇峰）の論、「経世經國の眼を以て之を見る、此現象は極めて不健全なる思想の發動ならずんばあらず……願くは人は人たれよ、人以上とならんことを求むる勿れ」とする『報知新聞』（石川半山）や「蓋し一種虛榮心的狂作乎……解すべからずば解するまで力めよ、厭世より樂天たるべき道理」をいう『東京日日新聞』の論を紹介した上、

……死者の死をして其意義を空しうせしめざらんは、実に生者の責任にして即ち『不可解』を解説すべき一の職分なり。況んや解決に必要なりとせらるゝ學術に對し失望せる青年の死の如きをや、吾人は眇乎たる青年の死をして、死といふことが彼自身一刹那の安立を得せしめたるを彼の爲に満足すると同時に、一個青年の自亡がよく現代存続の青

年に多少人生の意義を會点せしむべく、世人の之を聲道せんことを望む。生者は頻く生著一切の爲に一切此生より去る死者の死をして悉く遺棄ならしむべきなり……

と結論づけた。集谷天尊は『東京朝日新聞』(六月五日)に「懷疑と信仰(平少哲學者)」なる一論を寄稿し、藤村探の投身を「希臘古代の神話的悲劇中の、ロイカジアの岩頭より海中に投じたる、天女サツフォの往事」に擬し、旅頭の感は、「文簡潔にして旨高妙、蓋し古の聖者靈均氏の難經に勝る萬々」と賞揚し、「沈思冥想、仔細に氏の心要を推究し来れば、實に死以上に厲する、一種絶大の理想の存するありしを認むべし」と雖も、かくも悲惨の死を敢てしたるの原由は、畢竟懷疑哲學の罪なり」として、華嚴經大乘の教理によつて人生問題を解決すべきことを説いた。もつともよく、文学史的脈絡においてこれをとらえ、自らに身を寄せて論じたのは『讀賣新聞』(六月七日・十四日)「癸卯文学」欄の中島孤島で、「我れ何者ぞ」「センチメンタリズム」と題して頌詞を論じ、感傷の免かるべからざる理由を述べた。孤島は、「……あゝ我れ何者ぞや。人生幾多の憂愁あり、人誰か煩ひなからん。吾等はたゞこれを忘るのみ。事業に忘れ、生活に忘れ、國に忘れ、家に忘れ、學に忘れ、藝に忘れ、酒に忘れ、情に忘れ、快樂に忘れ、宗教に忘れ。たゞ忘るゝなり、然りたゞ紛るゝなり。是れを以て静夜思ひを衷に潜めて、「念我が生の秘密に對ることあらば、誰れかまた其の心の痛みを感ぜざるものぞ。然かも人は遂に此の如く忘れ、此の如く紛れて、永へに此の疑問の閃きに背かざるべからざるか」と論じ、さらに理想と現実の矛盾を言い、当代の病患を剔抉して、

嗚呼我れ何處にか往かん。眼は遙かに理想の光を望みつゝ、然かも遙遠として我が足は進まざるなり。嗚呼我れは何にかすべき。既に識らず、時代の病患に觸れて煩悶し、苦惱す。舉世皆な非にして我れも亦非なり。如何にすべし。或ものは世を厭ひ、生を咀ひぬ。或ものは泣き、或ものは叫びぬ。嗚呼我れ何者ぞやと。以爲へらく、我れを知るは凡てを知るなり、我が脚下を掘りて、湧き出づる泉に汲まずや、人何すれを近く其の心に求めざると。非狂愚に似たりと雖も、遂に聲を放つて一世の恥りを喚び覺さずんば已まざるなり。人は以て時代の痼疾といふ。然かも不健全なる社會が久しきに堪ゆべからざるを知らば、老衰せる社會に對して、復活の使命を傳ふるものは寧ろ此の痼疾にあらすや。……かくの如き不満の感情は常に青年の胸中に潜みて、時に鬱然として一世を襲撃す。其の現はるゝや、一切の外皮を剥ぎて、直ちに赤裸々の我れを示さんとす。其の力絃に存し、其の聲も亦茲に存す。此の如くにして幾多のウエルテルは生じ、幾多のマンフレッドは出づ、……

といい、かかる明治のセンチメンタリストの代表者として透谷と梶牛とを挙げ、さらに語をついで、「若し夫れ近時藤村某の如きに至つては、また等しく此思潮に漂へるもの、世は返すくもかの痼疾の恐るべきを唱ふと雖も、我れは寧ろ茲に潜める生命の閃きを認めんと欲す。憫あるものは幸なる哉、世は憫ある者によつて生きん」と高唱した。さきに、涙香黒岩周六が『萬朝報』紙上で藤村探の「舊学死」を非じたことにふれたが、六月十三日夜、教寄屋橋會堂で開かれた朝報社有志講演會での「藤村探の死に就いて」と題する講演は、世論の藤村批判に答えるかたちで、その死の意義についてより詳細に弁じたものである。涙香は、「巖頭之感」にも觸れて、「近來、斯の如く誠誠に富みたる名文章を見たることなし」といい、彼の心の「誠眞」が凝縮して「眞實なる此の美しき妙字學」をなしたと極擧した上、

然るに世の識者の中には此の文中の語句を笑ひ「ホレーシヨの哲學竟に何等のオインリチーを價する者ぞ」と有るを咎め、ホレーシヨと云ふが如き哲學者あるを聞かず、せめてはカントの哲學とでも云はゞ可なる可きに、多分藤村は自分がホレーシヨと云へる名も無き哲學者の書一冊を讀み、是にて哲學の一切を知れりと自謂して斯くは書せし者ならんと評したる人も兩三人ありと聞く、誠に沙汰の限りなり、ホレーシヨは諸君の知れる如く沙翁劇中の人物にして、今では似而哲學者の代名詞の如く使はるゝ名前と爲れるなり、藤村が此語を用ひたればこそ一切の哲學をば價而非哲學と一言に蹴落して、哲學者能く何の眞理をか捕へ得んやとの感慨が活躍して聞ゆなれ

と、半可通の識者の臆断をたしなめ、藤村の意のあるところを強調した。涙香は世間の非難から藤村探の自死を擁護すべく楠公の漢川での自殺を引き合いに出し、また「巖頭之感」を、その「壯烈さ」において、「七たび人間に生れて國賊を殲さん」という楠公のことばに比しているような、ジャーナリストティックな宣揚もあつたが、また「彼れの死は恨事なりと雖も、實は時代思想の反應なり、今の世は二元的の暗き信仰破れ、思辨的の舊き哲學滅び、而して未だ一元的の光明ある信仰の大地に興らざる中間なり、之を信仰上の過渡の時代と稱すべし」とする、時代を鋭く射る極要の言説もあつた。この講演は次の如く結ばれている。

時なる哉、時なる哉、藤村探なる者、天下に最著明なる風景の地に立ち、高く懷疑の標を掲げて人間空前の異擧を敢てせり、是れ豈に世人に對して、眞理を求むる上に性命よりも重んず可き由々しき大事あることを告げて人心を驚破するに足る者に非ずや、若し世に藤村探の如きもの相尋いで現はるゝありとするも、其れは時代の罪なり、時人が

萬有の真相に想到する根本問題の如何に重大なるやを捨て、顧みざるの罪なり、操の死は心界の暗に對する曉鐘なり、世人若し之れに依りて人間に快樂以上、肉慾以上、算盤、物質以上に大に眞面目なる問題のあることを想起せば彼れの死は空からずと云ふ可し、藤村操は時代に殉じたる者なり、彼に罪なし、時代に罪あり、此意味に於て彼をば得難かる節死者の二に數ふるも不可なかる可きなり

警世者として藤村操を位置づけようとする涙香の心よせとは別に「此の如き意氣地なき青年が現代の國民たるかと思へば、憂慮せざるを得ず」（『時事新報』六月十五日）、「其擧や殆んど無意義なり」（『東京朝日新聞』六月二十四日）とするのが世論の大勢であつた。

二

藤村操は、大蔵省で課長の職に在つた父胖の長子として明治十九年七月、東京大手町の官舎に生まれた。父が北地開発を使命とする北海道札幌の屯田銀行取締役赴任にともなつて、札幌で育ち、創成小学校を経て札幌中学校に進んだが、当時頭取だつた父の急死に遇い、上京して母弟妹をまじえた五人の生活が始まり、開成中学に通つたが、開成の二年から京北中学の四年次に飛び入り、三十五年九月、第一高等学校に進んだ。同級での最年少であつた。藤村は京北中学の同級で十歳近くも年長であつた当時仙台の第二高等学校在学中の南木性海を最も信頼し心を許していた。自死に至る心緒の揺らぎは、その書信に残されている。

「……僕此頃どうも悲觀に陥り易くて困る。これは一は信仰を有せざるに由る事であらうし、一つは又哲學知識の足らざる爲であらう、又一は現實の俗務がうるさく、舊思想の親戚間の感情の面倒臭い等の事より來たのであらう。どうも相變らずの煩悶子であるので困る。君よ、余を愛するならば希くは慰藉を與えよ。……」（三十五年十月七日付封書）「僕の端書で御推察でもあらうが、僕は此頃懷疑に陥つて居るのである。僕の腦は、今や大破壊を行つて居るのである。思ふに此時代は最も危き時代であるから大に修養に注意して居る。……君の此間の忠告で、漸く自己の低きを稍悟つた。ソクラテスの所謂「我は只我が知らざることを知つた」と云ふ程には行くまいが、少なくとも我が知らざることを知らん事を務めて居る事は事實である。」（三十五年二月十六日付端書）「嗚呼、如何したら宜いであらうか。僕は日々益々自己の弱きを歎ぜざるを得ない。此間は俗世間が氣に入らぬとつぶやいたが、昨今ちや全く自分がいやで仕方がない。僕は今哲學的懷疑に興はれたので、其苦痛の到底言語筆紙の表はし得る所でない。差當り僕は

自分の意力の甚だ薄弱なることを認めて苦悶に堪へぬのである。……僕の懷疑の内容は何かと云へば（凡ての）一言が盡して居ると思ふ。空間を疑ひ、時間を疑ひ、道義を疑ひ、審美を疑ひ、認識を疑ひ、實在を疑つて居るのである。所謂理法なるものを軽々しく信ぜられんのである。と云ふことを一言して置て、君の教導を待つのである。……」（十二月二十五日付封書）

三十六年の一月から四月末までに十回程の往復の後、最後となつた五月九日付の端書には次の語が見られる。「……僕其後變つた事もなく、一家團樂、身體健康、先づ客觀的に至つて幸福だと知り玉へ。さて主觀の方面は日々益々非である。僕の生活は全く煩悶と苦痛とで盡し、……何の慰藉もなく、何もかもいやで仕方がない。此間にすきなものは、永劫無變の自然と云ふ奴である。机の上には君の眞似をして、山吹躑躅を生けて置いてある。ウオーズウオーズの Nature did never betray the heart that loves her. と言ふ句があるが、これが僕の唯一の慰である。……」

これをしたためた二週の後、藤村操は、新緑映える華嚴巖頭に立つ。

一 高の同級中もつとも親密の仲だつた藤原正に届いた日光発信の書状には、毛筆で巻紙に

宇宙の原意義、人生の第一義、不肖僕には到底解きえぬ事と断念め候程に敗軍の戦士木陣に退かんずるにて候

二十一日夜

三 兄

操

とあつた。藤原は、藤村自死の一月程前、二人で不忍池畔を散歩しつゝ、たがいに人生問題解決の至難を論じ合つた際、藤村は「願はくは煩悶へくゞて我死なんおつに悟りて濟さんよりは」と即興の一首を洩らしたという。

藤村操が段瀑の前夜、したため「日光町小西旅店寓」として郵送した母宛の遺書には

不幸の罪は御情けの涙に御流し下され度候十八年の御恩愛決しておろそかに存じ候はねどもこらへかねたる胸のなやみあり只死する外に致方無之候何事も因果と御諦め被下度憂世はすべて涙にて候ものぞ

とあつた。また、藤原と同じく一高の友人北島霞江に遺品として贈つた露伴の『小尾花集』には、「五重塔」と共に併録された「血紅星」の作後に「我もこの血紅の星よ」といった意味の詞が記されていたという。さらに後年神代種亮が所蔵の『巢林子撰註』の表紙裏から発見したもので、次の詞が記されていた。

日本文學に大なる三あり。萬葉、源語、巢林子是なり。中に就て時代最も近く用語最も近く俗に近きものは巢林子

なり。僕人生活問題の解決を得ずして恨を徒らに華嚴に遺すと雖も、卿等を思ふの情に至つては多く人に譲らざるを信ず。今此書を遺して一は卿等が文藝に對する注意を喚び一は人生に對する眞率の研究を促す。

五月二十日夜

藤村 操

とあって、三人の弟妹の名が書き連ねてあった。死を決して口に出立する前夜、自宅にてしたためたものである。藤村操の自死が同世代の知的煩悶青年に与えた衝動は大きかった。向陵同窓の若者達への衝撃はより一層深い。藤村操より一級上の一高二年阿部次郎は、明治三十六年五月の日録に次のごとく記した。

二十二日(金) 學校にて濱野より藤村昨朝家を出で、未だ歸り來らざる由をきく。夕暮藤原と北島を訪ひしに、北島は頭重しとして臥し居れり。藤原藤村の宅に行き、余は砲兵工廠の後を廻つて歸り、圖書館に入りてルーテルの事を讀み、九時頃歸り來しに、藤原來りて藤村のことを語る。すべての形跡頗る決心の固きものありしが如く、彼の平生の思想の傾向等考へて自殺したるにはあらずやとの疑去り難く、最近一週間の事など考へ合せてとめどなき思出の種なり。余はあまり親しくもあらずしが、藤原は常に談笑せし友なれば、いたくなげくも道理なり。

二十六日(火) 藤村は華嚴瀑に投じて死せり。萬事皆夢の如く、此三四日は唯悲哀と追懐との中に暮す。如何に其死に様の美はしくして缺點なきよ。如何に其死因の思想的にして汚れなきよ。藤原其死體をさがしに行きて昨夜歸る。今朝我が寢室に來りて委しく其様をかたりたれども、余は一々之を敘するに忍びず。

此五日何も讀まず何もせず、北島等と往來して搜索の状況をきくのみ。余は彼と深き友たざりきといへども、其紅なる頬、其常にこゝしたる笑顔など目につきて忘れ難き思出の種なり。放課後〇を訪ひて四時半歸りしに、雲おどろおどろしく、雷なりさわぐ。

夜藤原、北島、安倍(能成)、山内、渡邊、岩波等來りて話し暮す。

これら一高同窓生達は、早速翌月の『校友会雜誌』(第百二十八号)で「あゝ藤村操君を想ふ」哀悼文を特輯、魚住影雄(折蘆)また、本郷教会牧師海老名正主筆の『新人』七月号に「藤村操君の死を悼みて」を書き、「悲泣三日、淡望七日」の悲哀の心懷を吐露した。魚住は三歳年長であるが、同年の九月に、藤村に一年遅れて一高入学を果たす。姫路中学を退学上京し、三十四年四月に京北中学第五年級に編入した際の操の同級生であった。魚住は、五年後の四十年九月に、友人長沢一夫に向けて、自己の思想史を叙した文(『折蘆書簡集』所収「自傳——友人諸君へ」)の中で、

藤村君と京北中學で半年以上も席を隣り合せてゐた。藤村君は僕を迷信家だといつてからかつた、僕は小才子だと

いつて排斥した。相容れざることを甚だしかつた。同君の卒業前はよほど様子が變つてゐたが交をむすぶまでもなくしてわかれた。三十五年十一月頃のことかと思ふ、僕の煩悶の絶頂であつた。藤村君に小石川の砲兵工廠裏で出會して互に立ちどまつた。顔を見合つて互に手を握つた。互に思ふことは云はずしてわかれた。此の別れるのは本意ない感じがした。後に二度訪ねたが留守だつたり又二人さしむかひではなかつたりしてしみる話さなかつたが、三十六年二月十一日に訪ねた折は膝を交へて五六時間語らつた。此時藤村君は砲兵工廠裏で會つたことについて「あの時君が手をふり切つて行つてしまつたから僕は仕方なしに本意なくわかれた」と云つた。此次には四月中旬に早稲田の方へ散歩に行つた。關口の水道側で藤村君は、煩悶といふことは其言葉さへ耳に快いと云つた。江戸川の岸では「Ich bin Christ」と云つたのはルーテルでした」と云つた。まだ一二の會話は記憶してゐるものがある。信仰はほしいが得られぬといふのであつた。藤村君とは殆んど此三四の外に深い交りの歴史はない。然しあの「巖頭の感」はいかばかり僕の心を附つたであらう。僕の曩日の苦痛は藤村君の外に知りうるものなく、藤村君の死んだ心は僕の外に察しうるものはないといふ様な感じがした。又藤村君は至誠眞摯であつたから死に、僕は眞面目が足りなかつたから自殺し得なんだのだと思つた。こまかい事はわからぬが、僕は藤村君の煩悶と僕の煩悶とは甚だ似てゐたものだと思ふ心は今もかはらない。羨しき藤村君の死は僕をして慟哭せしめ悶絶せしめた。僕は生れて以來藤村君の死ほどの悲痛を感じたことはない。僕は死を求めて得ざるに身を倒して泣いた。かゝる思は數日つゞいた。その内に五月はくられた。僕の心は暴風のふきまいた後のやうな感じであつた。然し藤村君は死旅の友を得るには死ぬことが少しく遅かつた。僕には信仰の微光が三月以來東の空にさしてゐたのである。けれども藤村君の死は僕にとつて非常な事件であつて、僕は斷じて人生を空に去るか、主觀の神を客觀の祭壇に齋き記るか、二者の一つを決定すべき機會を藤村君によつて與へられたのである。

と記した。安倍能成は一週忌に當つて、『校友会雜誌』百三十七号(明治37年5月)に、「我友を憶ふ」を書いて藤村を追懐しつつ自己の真情を流露させたが、魚住も同じ号に「亡友藤村操君の一週年に當りて此稿を草し得たるはわが深く悦ぶところなり」と小書した長文の「自殺論」一篇を投じた。その一半を抄出すると

……人生の意義は自家要求の充實を外にして探めるべからざるもの也。彼の自家の満足を棄て、理性の權能を主張し道德宗教の權威を説く、畢竟無意義のみ。……光榮ある生存の意義は自家の要求に絶対の聽従をなすこと唯之れ耳、斷じて唯之れ耳。彼の宇宙構成の説明を以て人生問題の解釋となすが如き哲學者、豈深奥なる「意義」に與るを得んや、要求は談理に非ざる也。吾人既に人生の意義の求むべき道を解す、其道はあこがれの道也。我既に憶る、事實を超え現實を超えて理想の彼岸に要求を提出す。空想の實在を要求し此要求を以て天籟の權威となす。一步も譲る能は

ず、渾身の熱氣我を促して求むる者を得んと欲す。されば自ら劇烈也、過激也、短氣也、狹隘也、無分別也、狂亂也。折衷を排し、中庸を斥け、常識を容れず、經驗を認めず、事情を顧みず、他日を許さず。煩悶を生命とし、懊惱を食物となす。求むるもの若し與へられずんば此天と此地とを否定し重ねて自己を否定するある耳。……意志の軟弱なる者、情感の浮薄なる者、一旦自己の本能的衝動の要求成らざるや直ちに之を撤回し、人の煩悶を笑つて外間を憚ることとを教へ、他日に延期せんことを勧めて只管に感世の法を授けんとす。此徒何んぞ全人的要求の機構を解せんや、人生の至高價值を辨せんや。「永久」の姿は煩悶に在り、「無限」の面影は機構にあり。至誠は劇烈ならしむ、狂熱の外に生命無し。……

茲に唯一人、直き者誠ある者、現實に安んぜざる者理想を要求する者、身を挺して義理を無みし人情を無みし、有無善惡、併せ情火に焼いて一我の主張に殉ず。されば自殺は意氣の死也、至誠と熱情との情死也、二つ相抱いて復原しくもあらず、萬有を後にし梵爾として永劫の闇に下る。人生の悲壯は屢其粹を抜いて茲に鐘る也、安んぞ復村學究が誹議を挾むの餘地を残さんや。自殺や之れ第二の解脱。第一の解脱を探る者が常に念頭において有事の日に備ふるところの者たる也。……

魚住はこれを草した直後に送った安倍への書信の一節に『自殺論』一篇は予の感情を興奮せしめて肉身の衰へを自覚するに至るまで予を苦しめたり、予はまことに戦慄し暫時筆をとらじとまで思ふ位なり』と記した。魚住が師事傾倒した綱島梁川は、この精神を尽した魚住の論の読後、端書に「自殺是非は論ぜず先づ我兄が筆の炎に焼かれたる思ひうれしく候」と感想を寄せた。安倍は晩年の回想で、この文章に書かれたことがそのまゝ、魚住の現実ではなく、「創作的昂揚」と「誇張」とがあることを指摘している。雄勁激越なこの「自殺論」は、その生徒への影響を懸念する学校当局の忌諱に触れ、核心の論旨の教行が濃い處で抹消されて寮生に配布された。

藤村自死の影響は、殊に安倍のクラス全体に動揺とショックを与えて、学校などはどうでもよい、自分の要求する所に従うべきとの思いつめから、学科をよそにした図書館籠りや、放恣な自己補充に身を委ねる者も多く、翌年七月の学年末には安倍をも含めて十七名が枕を並べて落第した。野上豊一郎・藤原正等は落第を免れた方で、安倍は『我が生ひ立ち』(昭41、岩波書店)で「中助助は意外に落ちなかった」と記している。

夏目金之助漱石は、熊本五高在職中に英国に留学したが、帰国後熊本に戻らず、明治三十六年正月の第二学期から一高の教授と東大の講師とを兼ねた。安倍能成も野上豊一郎も藤村操も漱石の最初の英語の教え子であった。テキス

トは、前任者山川信次郎の用いた Samuel Johnson 《Rasselas, Prince of Abyssinia》であつた。野上は「その頃」(二高文藝部『橄欖樹』昭10・2所収)のエピソードを次のように伝えている。「藤村は『ハムレット』を持ち歩いてゐた。まだ坪内博士の翻譯の出来ない前のことだから、無論原書である。私などはちよつと読みかけたけれども齒が立たなかつたので藤村はえらいと思つて感心してゐた。彼は色が白くて頬が赤かつたから日の丸といふ渾名をもらひだしてゐた。彼がその國體的標章をうまごやしその茂みに理めて横たはつてみると、散歩してゐた岩元さんがその傍へ立ちどまつて話しかけてゐるのを見たこともあつた。「藤村は相當に快活で、よくできてゐた。けれども、或る日、夏目さんが當てると、元氣よく、知りません、と云つた。知りませんとは、わからないといふことか、やつて来ないといふことか、と反問されて、やつて来ないのだと答へた。その次の時間に、またあつた。またやつて来なかつた。夏目さんは怒つて、やつて来ない量見なら、おれの時間に出ることはならん、と叱つた。それ以来休んで、やがて死んだのであつた。」そして藤村操投身の報道が所聞に出て間もなくの授業で、「夏目さんは、出席簿を讀んでしまふと、教壇のすぐ下にゐた学生に、嚴肅な顔をして、藤村君はどうして死んだ、と聞いた。その学生は、先生、大丈夫です、新聞に出てゐる通りの理由なんですと答へた。新聞には生存の意義を疑つて、解決ができないから死んだと書いてあつた。」「だから夏目さんの質問は嚴肅な不安の心からであつたに相違ない。けれども、われわれの方では、すでにその頃豫習どころではなくなつてゐた憐むべき同級生の心事を、直接に、もしくは後から間接に知つて、人ごとならず思ひわづらつてゐた際のことであるから、今、夏目さんの見當ちがひな心配に対して、聞かれた学生が、つひ、うっかり、先生、大丈夫です、と云つた、その率直な言葉の調子に、突然おかし味を見出し、それが先生の不安を救ふと同時に、みんなの鬱結してゐた気持ちに綻びを與へ、みんなは期せずしてにやりとした。夏目さんも反射的に、恐らく安心も手伝つて、にやりとした。まことに久しぶりの笑であつた。」と。そして野上は、これに續けて次のように記している。

けれども、また、憂鬱の日がつづいた。それから大學を出る頃まで、われわれのクラスは自殺者を三人出した。

漱石は明治三十七年二月八日の深夜、寺田寅彦宛の端書全面に左の詩をしたためた。

水の底、水の底。住まば水の底。深き契り、深く沈めて、永く住まん、君と我。
 黒髪、の、長き亂れ。薄屑もつれて、ゆるく深ふ。夢ならぬ夢の命か。暗からぬ暗きあたり。
 うれし水底。清き吾等に、譏り遠く憂慮らず。有耶無耶の心ゆらぎて、愛の影ほの見ゆ。

二月八日

木村毅は『比較文学新視界』(昭50・10、八木書店)でこれに触れ、『水底の惑』とは『巖頭の惑』の反対を云ったのである。藤村操の名の下に女子とつけたのも、やはり、反対を狙った皮肉であろう。文句に至っては分るが如く、分らぬが如く、意あるが如く、意なきが如く、曖昧模糊としてつかみ難い。只、藤村操が彼の念頭からなかなか離れなかつたことだけはこれによって確かである。」とし、「作家としての漱石は生涯、藤村を忘れることが出来ず、あるいは彼の異常な死に取り憑かれ、『虞美人草』の甲野さんを手始めに、『それから』の代助、『行人』の一郎、『心』の先生と、一連のハムレット型をつくり出した。」との理解が示されている。

木村が説くように、藤村の華厳自死は、漱石の作物に直接間接に影を落としていた。『吾輩は猫である』(第十)には「可愛想に、打ちやつて置く」と巖頭の吟でも書いて華嚴瀧から飛び込むかも知れない。」とあり、『文学論』第一篇第三章でも触れている。だが、作の内容にまで深く関わりをもつのは、虚子宛の書信の中で「近々『現代の青年に告ぐ』と云ふ文章をかくか又は其主意を小説にしたいと思ひます。」(明治39年10月17日)ともうした「呼分」であろうと思われる。中野春台君をして「一體煩悶と云ふ言葉は近頃大分はやる様だが……」と言わしめているこの作には、「深くして浮いてゐるものは水底の藻と青年の愛である。」(第七)という語もある。先の寺田寅彦に示した新体詩も、木村が説くような、「藤村操の名の下に女子とつけたのも、やはり反対を狙った皮肉」ととるべきではなく、「永く住まん、君と我」へうれし水底。清き吾等に、譏り遠く憂慮らずの句もあるごとく、藤村操の華嚴への投湯に、「愛の影」をみとめた、あるいは見ようとした漱石の鎮魂賦であり、自らへの慰藉でもあつたらうとするのが、私の理解である。藤村が懸想したであろう定かならぬ相手を、仮りに「女子」としたのであるまいか。

藤村操の自死の蔭に失恋を想定する向きも、かなり早い時期からあり、噂が更に噂を生んで、菊池大麓の息女の名などが取沙汰された。一高校庭の森の中に、小さな木札が立ち、「菊松女の墓」と記されて、赤飯が供えられたこと

もあつたのである。

※この稿は、昭和五十七年十一月十三日におこなつた学習院女子短期大学国語国文学会での講演の趣旨を骨子として
 いるが、思うところあつて引用資料の提示を大幅に増補したため紙幅を越え、二度に分載せざるを得なくなつた。統
 稿と併読していただければ幸甚。

藤村操は、大正教養派の原点とされる。藤村操の自死が象徴化されてゆく、いわゆる「神話作用」を追いつつ、そ
 の文学史的位相をさぐり、操生存説から生まれた『煩悶記』『操の書簡』『操の告白』『生存せる藤村操』『日
 本のハムレットの秘密』などにも触れて「衝氣」と「客氣」の文学的系譜にも言及しようとするのが、統稿での目論
 見である。

注1 操の父藤村胖の実弟。同じ盛岡藩の儒者那珂梧楼の後を嗣いだ。高等師範教授になる前に、東京女子師範学校校長を務
 めたことがあり、当時、鳩山春子などと共に学生であつた芦野晴子を、兄胖の後妻として推薦した。操は母晴子の生んだ
 長子であるが戸籍上では三男。操には二人の弟と、末に妹が一人あつた。妹恭子は、のち安倍能成に嫁した。母晴子の弟
 に、海軍大学教授をつとめた理学士芦野敬三郎がいる。

2 梗概は六月十六日、十八日の『萬朝報』に載り、講演速記が『朝報社有志講演集第一集』に収められているが未見。講
 演速記を文語調に直したと思われる『涙香文選』(大正十五年十月、涙香七回忌記念として萬朝報社刊)収載文によつた。

3 ハムレット第一幕、第五場の

There are more things in heaven and earth, Horatio, Than are dreamt of in your philosophy. (この天地の間に
 はな。所謂哲学の思ひも及ばぬ大事があるわい。) 岸内道彦訳

「スエズ以東第一の哲学者を自任して居たととき井上哲次郎博士は、哲学も碌々学びもしないで生意氣だとなげなし、ホレ
 ショの哲学なんかは哲学といふべき程のものでないと喝破した。博士が果してホレーショを知つて居たかどうかは知ら
 めが、ホレーショはシェークスピアの「ハムレット」に出てくるハムレットの親友であつて、藤村の文章の意味は、ハム
 レットも考えた如く、哲学めいた理想が人生のなまなましき苦悶を解決する力がないという意味であることは明らかであ
 り、ホレーショの哲学という体系が存在するわけではない。当時藤村がデイトンの註で「ハムレット」を読んで居たこと
 は、私も知つて居り、藤村が上の意味でこの文をなしたことも疑ない。」(恋愛と自殺について)「ハムレット」の中で、

ホレイショーは最も理性的で、最も賢明な考えの持主で、極端さを見せず、常識の健全さを備え、知性と穏健さと慎みの人間として存在している。ハムレットがホレイショーを友とするのは、自分とはちがいが、情熱と分別とを程よく調和した人物であるからだ。一方、英国へ送られる船中で、無鉄砲さとか無分別も立派に役に立ったと話す件があるようにホレイショーを批判する一面をも持つ。藤村は「ホレイショーの哲學竟に何等のオーソリチーを價するものぞ。」とものわりのよい中和的常識哲學に己れの情念をぶつけ、ハムレットに自らを擬している。

4 「恋愛と自殺について」私も昔は自殺を思ったこともある」(『文藝春秋』昭和33年3月号)

5 漱石は鈴木三重吉宛の書簡(明治39年6月7日付)で「今の世に神経衰弱に罹らぬ奴は金持の魯鈍ものか、無教育の無良心の徒か、ならずば、二十世紀の輕薄に満足するひよろろく玉に候」ともらしている。「野分」のもつ根源的モチーフに「真面目」に立脚した神経衰弱的青年層への顧慮がはたらいていよう。これについては、小泉浩一郎の「観念と現実——『野分』論」(『講座 夏目漱石 第二卷』昭56・8、有斐閣)に詳説がある。